

踊 共二氏学位請求論文『改宗と亡命の社会史 —— 近世スイスにおける

国家・共同体・個人』 審査報告要旨

1. 本論文の主題と構成

本論文は、近世（宗教改革と市民革命に挟まれた時代）のスイスにおいて宗教改革に伴って頻発した改宗と亡命という現象に注目し、関連する各種の史料（改宗手続き、住民手続き、生活保護関係の手続き、裁判記録、教会人の日記など）を分析検討することをつうじて、この時代の平民世界における「個人」の多様なあり方を明らかにすると同時に、近代国家の形成をも視野に入れながら、「個人」という視座を設定することによって、従来の国家・共同体・家を中心とする視点からの近世社会の理解を見直し、自律的個人の出現とその意味を明らかにしようとしたものであり、さらにはその成果に基づいて、近世ヨーロッパ社会の特質を考える一つの手掛かりを得ようと試みたものである。

本論文の構成は、序論「近世史研究の動向と問題の所在 —— 諸宗派の歴史的役割をめぐって ——」、第一章「近世スイスの宗派情勢」、第二章「聖職者の改宗と亡命」、第三章「平民信徒の改宗と亡命」、第四章「女性および未成年者の改宗と亡命」、第五章「国家・共同体・個人」、結論からなり、これに、図表、貨幣換算表、文献一覧などが付されている。

2. 本論文の概要

序論では、宗教改革以後に分立した西欧世界の諸宗派の歴史的役割をめぐると中心に、ドイツ史学界における代表的な近世史研究の流れを跡づけながら、「国家」と「共同体」というこれまでの視座に加えて、「個人」という視座を設定する必要を説き、近世スイス諸邦における改宗と亡命という現象をつうじて「個人」の多様なあり方を検証するという本論文の課題を提示する。

ついで第一章では、まず近世スイスの宗派情勢を概観し、改革派とカトリックの教会がそれぞれ諸邦の権力と結びついて「宗派化」「規律化」政策を推し進め、互いに改宗者の獲得に努めたことや、改宗と亡命がこの時代の重要な社会問題であったことを指摘する。そして各種史料に基づいて各地の改宗者の数や、社会の各層におよぶその社会的出自の多様性を明らかにしている。

第二章では、聖職者の改宗と亡命の個々の事例を詳細に検討し、改宗した宗派の信仰に生涯忠実であった者、もとの宗派に再改宗した者、「交換された」改宗者などの、改宗者の多様な形態を明らかにするとともに、それが平民信徒の改宗と質的に異なるものでなかったことや、改宗聖職者の移動はスイスにとどまらず、イタリア、フランス、ドイツにもまたがる場合があったことなどを指摘する。

また、第三章では、平民信徒の改宗の実態を明らかにし、その諸相を検討している。改宗者には、芸術家や医師、門閥市民といったエリートばかりか、無名の手工業者や農民も含まれていた。従って、彼らの改宗も聖職者のそれと同様に極めて多様であったが、彼らの社会的地位が「居留民」ないし「一時滞在者」の立場にとどまっていたことを明らかにし、それに関連して、近世の共同体が内部的に分裂しており、変貌と流動性によって特徴づけられることを指摘している。

さらに第四章では、女性および未成年者の改宗の事例を検討し、彼らの改宗の動機が種々様々であったことや、彼らの亡命後の生活や社会的地位も様々であったことを明らかにしている。また、異宗派婚から生まれた子どもの問題や、それに対する規制などにも言及しているが、いずれにせよ、女性や未成年者の改宗と亡命、異宗派婚などは「自由意思」に基づく場合が多く、諸宗派の分裂状態が、老若男女を問わず、平民信徒たちに、新たな自己実現の可能性と自己主張の力を与えた、と論じている。

第五章では、特にルツェルンの事例を取り上げ、改宗と亡命という社会現象において「国家」、「共同体」、「個人」の意思がどのように交錯していたかを検証し、改宗した自律的個人は平民社会における「脱宗派化」と信仰の「個人主義化」を促進したこと、それが国家の「世俗化」に先行していたことなどを指摘している。

最後に、「結論」では、スイス諸地域においては、平民信徒たちの中にも自律的に思考し行動する個人が出現してきたが、それは宗教改革以後の宗派分裂、信仰の多元化という

混沌とした状況の中で、「個」の自覚が深化してきた結果であり、彼らは来るべき時代の自律的個人の姿を先取りしていた、と推論している。

3. 評価

宗教改革以後、各国家・領邦は、特定宗派の信仰を支配下の人々に強要し、信条を通じて人々の内面を統制しようと図り、このような宗派化を梃子に従順な臣民を育成することで均質的な中央集権的国家の形成に道を開いた。現在のドイツ史学界では、この宗派化の概念を用いて初期的近代国家の形成を論じることが通説となっており、その際、家父長制のもとにあった「家」と、そうした家父長によって構成される共同体とが、この時期の国家を末端で支えていたことが強調されている。

論者は、近代的個人の確立に着目する観点に立って、以上のような通説を真っ向から批判している。宗派化の時代にあっても、社会は国家・共同体・家に抑えられた「もの言わぬ臣民」「没個性的な群衆」で一色に塗り込められていたわけではなく、民衆レベルにおいてもある程度の自律性を具えた個人が存在していたのであって、そうでなければ、18世紀に啓蒙思想家が「個人の自由」を唱えたとしても受け入れられる筈がないというのが、論者の基本的な観点である。この観点は斬新かつ卓抜であると大いに評価できよう。

もっとも、民衆レベルの個人の実像を歴史的に把握することは、近世においても困難である。そこで論者は、以上のような観点を論証するための具体的な素材として、スイス諸邦における改宗という現象に注目し、改宗の結果として亡命した人々の動きを追求した。この時代のスイスは、13の主権を持つ小邦からなるいわば小国家連合（盟約者団国家）を形成していた。そして、二宗派併存を認めざるを得なかった例外的な邦を除いて各邦は厳しい宗派化政策を敷き、特に共同支配地をいずれの宗派で染め上げるかに心血を注いでいた。その中で、対立する宗派からの改宗・亡命は自宗派の信条の正しさを証明することになるので、宗派化を目指していた各邦は進んで亡命者を援助し、一方、改宗・亡命者はその援助を巧みに利用して、邦を捨て、亡命したのである。このことを明らかにするため、論者は、スイス各地・各邦の改宗・亡命にかかわる史料を渉猟し、個別的・数量的な分析を行い、それをつうじて、宗派化の時代にあっても、国家宗教や家から自由に行動した個人が多数存在したことを明らかにするとともに、したたかに生きる個人の姿を生き生きと描き出すことに成功している。これは緻密な作業によってもたらされた注目すべき成果といえるし、この成果に基づき、宗派化の実態を従来以上に明確にし、通説とは異なって、宗派化による支配がそれほど有効に貫徹していなかったことを明らかにした点も、高く評価できる。

しかしその一方で、本論文を読むことによって、そこで取り扱われていない点に関する疑問も幾つか生じてこよう。例えば、個人を座標軸として近世の歴史を考察するという観点に立つのであれば、改宗・亡命の道を選ぶに至らないまま、宗派化政策のもとで苦しんだ多数の民衆にも目を向ける必要があるのではないか。また、既に宗教改革以前においても人々の流動にはかなり激しいものがあったが、それと宗派化時代の人々の移動との間には質的に同じ問題が存在していたことも十分に考えられるのではないか、などの疑問である。また、こうした問いとの関連において、人口の急増、相続慣行や経済構造の変化についても、視角を変えた新たな考察が求められるように思われる。

とはいえ、本論文は、従来の通説を批判するという明確な観点に立ちつつ、巧みな史料分析を通じて、近世における自律的個人の存在とその意義とを明らかにしようとした研究であり、近世西欧史研究の発展に資するところ大であると確信される。

よって本論文は、博士（文学）の学位に相当する価値を十分にそなえているものと判定される。

2002年 10月30日

主任審査員	早稲田大学教授	文学博士	野口 洋二
審査員	日本女子大学教授	文学博士	森田 安一
審査員	早稲田大学教授		大内 宏一